

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520063

研究課題名(和文) ポスト多文化主義における公教育と宗教の関係

研究課題名(英文) Public Education and Religion in Post-Multicultural Situations

## 研究代表者

藤原 聖子 (Fujiwara, Satoko)

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：10338593

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：近年、欧州諸国において多文化主義の限界が指摘されているが、それとともに公教育における宗教の扱い方も変化しているのかを主にイギリスについて調査した。明らかになったのは、多文化主義政策に呼応する従来の異文化理解的宗教教育から、市民性教育的宗教教育へと(少なくとも理念上は)方向転換が起きたことである。日本では異文化理解は市民性教育の一部とみなされる傾向があるが、宗教を教育の対象とした場合、両者は相反する特徴を示す。欧米の文脈であれば、コミュニタリアンないし公共宗教論的と位置づけうる変化だが、トルコでは同種の教育がイスラム側から必ずしも評価されていないという現状に着目し、その功罪を分析した。

研究成果の概要(英文)：It was in 2007 that the UK government issued a guidance which made it a duty for schools to promote “community cohesion.” Since then, religious education in England has been directed to contribute to the new duty more explicitly, and teaching materials with reference to the term have started to be published. This shift can be called “communitarian” (a la Sandel and Taylor) or “post-secular” (a la Habermas). It has concurred with the “religion in the public sphere” discussions within the study of religion as well as with the development of citizenship education. This research has examined the benefits and dangers of this shift, which is not confessional but normative nonetheless, by comparing it with a similar change in the quite different social context of Turkey. Examples were taken from religious education textbooks in England and in Turkey to show how the representations and applications of religion(s) have changed.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教 宗教教育 教育 多文化主義 公共 公共宗教 宗教と暴力 市民性教育

## 1. 研究開始当初の背景

2010年にメルケル独首相が「(ドイツの)多文化主義は失敗した」と発言し、続いてキャメロン英首相も同様のことをイギリスについて述べた。多文化主義政策は多文化共生をもたらさず、かえって国内をエスニック集団に分断し、マイノリティは疎外状況に置かれ続けているという問題が指摘されるようになった。

ヨーロッパ諸国には、国教会が存在した歴史的事情により、公立校でも宗教教育を現在に至るまで必修としている国が多い。その中でも特にイギリスの宗教教育は、キリスト教の宗派教育から多文化主義教育(multi-faith, non-confessional approach = 多宗教的 非宗派教育的アプローチ)へと、他のヨーロッパ諸国に先駆けて転換を遂げ、多文化共生に貢献するものと評価されてきた。

ところが、そのイギリスにおいても、民族対立、テロ事件が21世紀に入って相次いだ。その状況への対策として、イギリス政府は、学校教育の主要な目標に「共同体の統合 community cohesion」を加えることを要請した。宗教教育や市民性教育は、そのために直接的に役割を果たすと期待をかけられるようになった。

それまでの多文化主義的宗教教育では「共同体の統合」という目標を十分に達成できなかったのだとすれば、そのどこに問題があり、どう改善しなくてはならないのか。これに関するイギリスの議論は、日本の公民教育(倫理、国際理解教育、異文化理解教育など)にどのような示唆を与えるだろうか。こういった問いが、本研究を始める問題関心となった。

## 2. 研究の目的

多文化主義導入の前、後、現在において、公教育での宗教観、宗教の位置づけ、宗教の扱いがどう変遷したかを、主としてイギリスについて分析する。比較のために、「共同体の統合」という目的がヨーロッパ諸国よりも強く意識されてきたトルコの宗教教育、また、同時多発テロ事件以降、イスラムフォビア問題が台頭しているアメリカの社会科教育における宗教の扱いを分析する。

共存と共生のための公教育は、多様性を尊重するとともに、多様性を管理するという面を持っている。この二重性が、宗教を対象とする場合はどのように現れるかを明らかにすることは、現代社会において宗教と世俗社会の関係がどう変わりつつあるのかというより広い問題を解明することにつながる。

## 3. 研究の方法

イギリスの1950年代から現在までの宗教科の教科書、アグリードシラバス、教育に関する政府文書を主な一次資料とし、宗教記述

や宗教の扱いの変化を調べた。教科書に関しては、2010年代に出版されたものを約30冊、2000年代に出版されたものを約50冊、それ以前に出版されたものを約100冊収集することができた。

さらに、教科書のみではわからないイギリスの教育の状況(たとえば合同礼拝の実施状況)については、現地の学校の見学や、宗教教育を専門とする研究者へのインタビューを行った。

トルコに関しては宗教科教科書、宗教科のないアメリカに関しては歴史・社会科教科書をそれぞれ、同様の観点から調べた。

結果を比較し、多文化主義の宗教教育への影響と、ポスト・多文化主義的宗教教育の実態とその特徴を明らかにした。

## 4. 研究成果

### (1) 概観

上述のように、多文化主義政策に呼応する、従来の異文化理解的宗教教育によっては暴動やテロの発生を防ぐことができなかったイギリスにおいては、2000年代中頃から宗教教育の方向転換が起こった。これは共同体の統合を目的(の一つ)とし、諸宗教の相互理解だけでなく、生徒の社会参画を促し、討議を通して宗教に関わる共通の社会的課題の解決にとともに取り組むことを可能にするための教育に向かうものである。宗教教育の市民性教育的転回、ないしコミュニタリアンの転回と名付けうる動向である。

異文化理解教育から市民性教育へというこの転回により、宗教の教え方に大きくは3つの変化が起きていることが教科書の分析からわかった。すなわち、

「宗教と暴力(テロ事件)」といった、かつては避けていたトピックを正面からとりあげるとともに、宗教の社会的役割や公益性をも強調していること。

異文化理解的宗教教育の段階では、「宗教と暴力・差別」といった宗教の負の側面は、扱いにくいトピックであった。お互いの宗教のよい面のみを知る方が、共生につながると見なされたためである。また、何よりも現場の教師がそのようなデリケートな問題を、民族・宗教的に多様な生徒から構成される教室でとりあげていくことを敬遠した。

それに対して、市民性教育型の宗教の授業では、国内外のテロリズム、宗教対立・民族対立・宗教差別・宗教による差別が題材として積極的に使われ、対立の解消にはどうすべきかという問題が学習者に投げかけられている。教員への支援としては、「宗教と暴力」のテーマをどう扱うかという問題に特化した、HP上の教育情報・教育研究ウェブ・サイトが政府の支援により立ち上がり、運営されている。

また、宗教者の平和活動はもとより、国内

の諸宗教の団体・コミュニティが地域福祉活動や国際的な支援活動を展開している状況が詳しく述べられるようになった。それに伴い、各宗教に関するキーワードも変化している。ただし、その結果として、どの宗教も環境を重視し、慈善活動に熱心で、平和を希求しているというように、諸宗教が同質化される傾向も生じている。

討議の前提として各自の道徳的判断の根拠を意識化させることにより、信者の描き方においていわば「ロボット化」が生じていること。

これは政治哲学者マイケル・サンデルの授業実践を通して、日本でも広く知られるようになった教育方法である。異文化理解的宗教教育では、文化人類学風に、他の宗教の祭りや習慣を理解し、親しむことに重きが置かれていたが、それに対して市民性教育的宗教教育では、公共哲学的観点から、共通の問題に対して、市民による公的な討議を通して取り組むために、諸宗教についても、その道徳的・倫理的判断との関わりが注目されるのである。

しかし、サンデル的な市民性教育の手法を宗教に適用する場合は、あらゆる宗教の信者が常に、宗教的根拠に基づき、一つひとつの善悪判断を行い、行為を選択しているように錯覚させるという問題もまた見受けられた。

討議を通して共通の価値を志向させるために、他者の信仰を価値中立的に受け入れるのではなく、それらに対し評価や助言をさせるようなアクティブ・ラーニングが増えていること。

異文化理解的宗教教育では、他の宗教やその信者に対して良い悪いの評価を行うことは、自分の価値観の押しつけになり、異文化理解にならないとされていた。市民性教育型宗教教育では、価値相対主義は、他者や社会に対する無関心であり、それよりも、他者の信仰や考えを尊重しつつも、積極的に意見表明を行うことがよしとされる傾向がある。ただし、そのような評価が、諸宗教の序列化にならないよう、注意が払われている。あくまで個別の事例、特定の行為に対して、評価や助言をすることが促されるのであり、「宗教」単位での順位付けや優劣判断は避けられている。

以上の発見とその社会的意義を、イスラム過激派による事件報道が相次ぐアクチュアルな国際状況に照らし、日本にとっても妥当性をもつ議論になるよう、まとめている。

## (2) 理論宗教学的観点から

(1) は教育学的観点から得られた成果だが、理論宗教学的観点では、宗教教育を現代宗教現象の一部とみなしこれを社会学的に分析することにより、次のような考察が得ら

れた。

イギリスの2000年代以降の状況は、公共宗教論(公共圏と宗教の関係に関する議論)に関連づけることができる。広義の公共宗教論には、社会的紐帯の強化に宗教団体・者の役割を認めるソーシャル・キャピタル論、公共の討議において宗教団体・宗教者が伝統知に基づく意見を表明するような市民社会を築こうとする公共哲学という2つの主な系譜があるが、現在のイギリスの宗教教育では、この両者が合流し、かつその理念を実践に移しているのである。

この新展開は、社会的文脈としては、ポスト多文化主義のみならず、ポスト世俗主義にも結びつけることができる。ポスト世俗主義は世俗的な立場以外を認めるものであり、ポスト多文化主義よりも多文化主義に近いという位置づけ方も理論上はあるのだが、宗教教育の現状は、この両方に対して整合的に分析することができる。

は、上記(1)で示した通りである。イギリス宗教教育の特徴である、多宗教的・非宗派教育的アプローチ(多様な宗教の生徒が同じ教室で、様々な宗教について学ぶアプローチ)自体は変化していないが、異文化理解を終着点とせず、センシティブなトピックを積極的にとりあげ、レジリエンスのある社会の形成に貢献する宗教教育を推進するようになった。宗教の多様性を表す語として pluralism よりも diversity が多く使われるようになった変化はこれに連動している。

ポスト世俗主義的文脈 イギリスは国教制であり、公立校にも宗教系の学校が多く存在し、宗教科が必修科目であるというように、もともと政教分離社会ではないのだから、ポスト世俗主義という概念は該当しないという見方もある。しかし、教科書の記述は、J・カサノヴァやJ・ハーバースが論じるような、公共圏における宗教の役割を、イギリス国内の主要6宗教すべてが果たしている・しうることを強調するものに変化している。具体的には、経済格差、生命・医療倫理、同性愛者や他のマイノリティの人権、動物の権利、環境保護などの問題について、各宗教がどのような見解(ただし、内部でも多様な見解)をもつのかを知り、生徒自身の意見と比較する、あるいは信者と無宗教者間の対話をロール・プレイ形式で行う(「探求の共同体」を形成する)といった内容である。

さらに興味深いのは、と が合流することにより、公共宗教論言説にはない展開も見られるということがある。たとえば、公共宗教論では、世俗的な市場原理・科学主義の立場と見なされがちな医療技術肯定の立場が、宗教側にも存在するという記述がある。大英帝国の植民地支配問題の扱いについても、学術上のポストコロニアル～ポスト世俗主義論の展開とは異なる動因による変化が見てとれる。

### (3) トルコとの比較

トルコの宗教教育は、世俗主義勢力と親イスラム勢力の政治的対立の影響を受ける形で変化してきた。1982年に公立学校で「宗教文化と道徳」という科目名で宗教教育が必修化されたが、これは親イスラム勢力ではなく世俗主義側による政策であり、その目的は宗教教育を国家が管理し、世俗主義の範囲内での教育とすることだった。この宗教教育の特徴は、世俗的道德がイスラムに先立ち、前者の諸項目に合わせて、後者の教義・実践が取捨選択されていること、他宗教への寛容が説かれ、それらとイスラムの価値観の共通性が強調されていること、世俗主義が信教の自由を保障し、それがトルコの誇るべき伝統であることが強調されていることである。

2012年の教育改革においては、親イスラム側の巻き返しが起こり、イスラムの宗派校であるイマーム・ハティブ中学校が再開されるほか、公立校でも選択科目としてイスラム中心の宗教の授業が増加している。

以上のトルコの状況をイギリスの宗教教育と比較するならば、現在の市民性教育型の宗教教育に近いのは、「宗教文化と道徳」の授業である。それはすなわち、イギリスのポスト多文化主義的ともポスト世俗主義的とも位置づけるフェーズは、トルコではポスト世俗主義的な2012年以降ではなく、世俗主義が宗教を管理する姿勢を明確に示した1982～2012年に対応するということである。

このことは、イギリスに関しては、「公共圏における宗教の役割」としてこのところ積極的に評価されている現象も、公教育という枠内でなされる限り、ある種の管理という面を伴っていること、あるいは社会の安定という上位の目的のもとで表れる副次的な現象であることを示している。

他方、トルコの2012年以降の状況は、それが現在の国内のパワーバランスの産物だとしても、対外的関係までを射程に入れるならば、安定に資しているのかについては疑問が付されるだろう。ただし、2012年以降の状況は、市民性教育型の宗教教育を重視するあまり、それに合わないイスラムの教義・実践が取捨選択されてきたことに対する反動とも理解できる。つまり、イスラムそのものを学ぶ宗教教育の増加は、市民性教育型の観点を優先した宗教教育に対する不満の表れでもある。

いずれの国においても、公教育において宗教を尊重するということは、「宗教の社会的意義を評価すること＝宗教側から見れば宗教の利用」なのか、「宗教側の論理や要望を優先すること」なのかという点が、根本的な問題として浮上している。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

Satoko Fujiwara, "Geertz vs. Asad in RE Textbooks: A Comparison between England's and Indonesian Textbooks," in *RE 21*, ed. by Jenny Berglund. Springer, 2015 (forthcoming).

Satoko Fujiwara, "Establishing Religion through Textbooks," in *Textbook Gods: Genre, Text and Teaching Religious Studies*, ed. by Bengt-Ove Andreassen and James R. Lewis. Sheffield: Equinox, 2014, pp.43-61.

宮崎元裕「トルコにおける多元的宗教教育の状況とその可能性—イギリスとの比較を通して—」『京都女子大学発達教育学部紀要』査読無、11号、2015年、31-40頁。

宮崎元裕「トルコにおける2012年義務教育改革—宗教関連選択科目の新設とイマーム・ハティブ中学校の再開に注目して—」『京都女子大学発達教育学部紀要』査読無、10号、2014年、21-30頁。

宮崎元裕「多文化時代における価値教育の変容—論理的思考の重要性に注目して—」『京都女子大学発達教育学部紀要』査読無、9号、2013年、37-44頁。

〔学会発表〕(計5件)

藤原聖子「ポスト多文化主義とポスト世俗主義の接合 英国宗教教育の現在」日本宗教学会、同志社大学、京都府京都市、2014年9月13日

宮崎元裕「トルコにおける2012年義務教育改革と宗教教育」日本比較教育学会、名古屋大学東山キャンパス、愛知県名古屋市、2014年7月12日

Satoko Fujiwara, "The Dynamics of Religious Diversity and Social Cohesion within School Textbooks: A Reflection on 'Contextual' Religious Education Research" CARD (Critical Analysis of Religious Diversity) Seminar, Nyborg, Denmark, 2014. 6.6 招聘講演

Satoko Fujiwara, "Why RE in Japan?" RE21 Conference, Cork, Ireland, 2013.8.29 招聘講演

Satoko Fujiwara, "Geertz vs. Asad in RE Textbooks: A Comparison between Warwick's Ethnographical Textbooks and

Indonesian Textbooks” European Association for the Study of Religion, Stockholm, Sweden, 2012.8.25

〔図書〕(計2件)

山中弘、藤原聖子共編『世界は宗教とこうしてつきあっている』弘文堂、2014年(264頁)

藤原聖子(共著)『宗教なしで教育はできるのか』春秋社、2013年(285頁内、5-29頁)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤原聖子 (FUJIWARA, Satoko)  
東京大学大学院人文社会系研究科・准教授  
研究者番号：10338593

### (2) 研究分担者

宮崎元裕 (MIYAZAKI, Motohiro)  
京都女子大学発達教育学部・准教授  
研究者番号：20422917